会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和4年度職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進事業  （２）教職員の資質能力向上の推進②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第2回学習評価ワーキンググループ |
| 開催日時 | 令和4年9月1日（木）　15時00分～17時00分 |
| 場所 | リファレンス駅東ビル貸会議室（オンライン併用） |
| 出席者 | 事業責任者等：高岡　信吾、岡村　慎一、上里　政光（OL）計3名  委　　　　員：植上　一樹、小田　茜、岩崎　千鶴、佐藤　昭宏（OL）、  丹田　桂太（OL）、近藤　賢宏、水田　真理（OL）  田澤　初美（OL）  計8名  請 負 業 者 ：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計12名 |
| 議題等 | １．今後の予定の確認  ・資料「第２回　学習評価WG議事」をもとに、今後の予定の確認。（植上）  （１）全体のスケジュール（WG）  9月　2021年度版研修の振り返りと修正に向けて・2022年度版の調査・設計に向けて  10月　2022年度版の検討①  12月（11月）　2022年度版の検討②  1月　2022年度版研修の振り返りと修正に向けて  2月　事業全体の評価とまとめ  （２）第1回研修に向けて  9月8日13時～　岡山　担当　1佐藤2小田  ２．京都・沖縄での研修の振り返り・共有と岡山に向けて  （１）京都研修の振り返り：水田→田澤  〇ヒアリング司会による振り返り（水田）  ＜概要＞  ・8月9日13：00～16：00に研修、その後16：30～17：15まで意見交換会を実施。その際の司会を私が務めた。場所については、YICの京都ビューティ専門学校。  ・研修者は1時間目が植上先生、2時間目が小田さん。研修に参加された方はYICビューティ専門学校の美容科、ビューティスペシャリスト科、ブライダルホテル科の先生方7名、学科ごとの3グループで実施。  ＜研修について＞  ・1時間目のところで、「非認知能力」の説明についてこれがどういうものなのかというところで戸惑いがあった、という点。抽出のところで、職業専門的側面と非認知能力について、少し結びつけるところのワークで苦戦をされていることがあったという点。この点については、事前の課題として、非認知能力について考えてきてください、という形で伝えていてもよかったのでは、という意見があった。  ・抽出について、学科によって抽出のスタイルが異なっていたように見られていたという点。例を挙げると、非認知能力を比較的常日頃から意識されているブライダルの学科と、資格要件で教育内容が決まっている美容、というところでかなり差が見られて、常に意識している学科についてはかなり話が盛り上がったが、美容に関しては資格で決まるところがあるので、具体的な場面を想定するときに皆さんの意見があっていない、というか議論にかなり時間がかかるというような違いがあった。  ・抽出の際にどのニーズから、例えば入学者のニーズなどがあるが、今回に関しては企業ニーズにかなり偏ってしまったという点。なので、入学者の視点なども想起させるような要素を事前に提示していく必要があるのでは、という意見があった。  ・抽出と分類というところでワークが進んでいったが、一連の流れになってしまったことで、抽出の意義や分類の意義などが参加者の中に浸透しないままワークが進んでしまったというところが見受けられたということで、ワーク毎に抽出の意義は何か、分類の意義は何か、というところを1度明確にした方がいいのではないかという意見があった。  ・参加者の立場から、研修に参加した際に、何かしらの成果物（証拠物）があった方がいいのではないかという意見があり、目に見える何かが最後に残るとよりいいのではないかという意見があった。  ＜今後のシラバス評価に向けて＞  ・今後シラバスにするときに、科目にどう落とし込むかというときに、意識の問題ではあるが、科目が目的化してしまわないようにしたいという意見があった。  ・抽出された非認知能力が全グループ「コミュニケーション能力」だったというところについて、全部の科目に当てはめるのではなくて特定の科目、例えば美容であればサロンワークコンテストという科目に当てはめるなら、という形でもいいのかもという意見があった。  ・評価について、評価が主観的になる可能性は捨てきれないという話になった。  →文字起こしがすでにSlackに上がっているので、確認いただけるとありがたい。（植上）  〇研修実施校の教員による振り返り（田澤）  ・研修をしていただいた後に特別振り返りの機会を持ったわけではないが、非認知能力ということにあまり意識がなかった教員に関しては、単純にすごく勉強になったといったところで、いくつか雑談ベースで教員と話した教員たちの感想などをお伝えしたいと思う。  ・今回、研修に参加させていただいたのは、美容科、ビューティスペシャリスト科、ブライダルホテル科の3学科で、その3学科でグループ分けをした。それとは別に、教員歴1年から3年が2名、3年から5年が3名、5年以上（10年近い）が2名という感じでしていた。1～3年目の教員は、1限目の講義の部分がすごく難しいと感じた教員が何名かいた。研修を受けるうえでの前提条件のような知識がないまま、受けてしまっていたので、「難しかった、でも、大学の授業ってこんな感じなんですかね、すごく新鮮な感じでした」という感想もあった。その点については、沖縄でやったような事前課題、事前情報がYICでもあった方がよかったのかなと思う。  ・教員経験が浅い教員にしてみれば、イメージがあまりわかないことがあったようで、これは難しいのかもしれないが、「先生方、普段の授業の中で、こういうことってありますよね」とか、「普段、学生指導しているうえで、こんなこと、こういうケースってありませんか」だったり、「オープンキャンパスで、高校生の子や保護者の方に、こんな質問とかされませんか」とか、そういった「あ、こういうことかな」とイメージできるようなことがあると、教員歴が浅い、キャリアがあまりない教員でもイメージしやすかったのかな、と思った。  ・もう少し経験のある教員にしたら非認知能力、いわゆる私たちがいつも言っている「人間力」とか「人間性」みたいなことですよね、と、そういったところを伸ばしていってあげたいですよね、と。伸びたということを、どういう状態からどういう状態に伸びた、それをどのように評価する、という具体的なところを知りたかった、評価の部分がもっと知りたかった、という話が一部の教員からあった。今回していただいた研修は、まずは共通認識をはかって、抽出して、それを分類して、というところまでだったと思うが、その後にこのような研修がある、という、全体像やゴールの姿が最初にあったら、「全体の研修の中の今日はここのところをやるんだな」という感じで、もう少し意識ができるのかな、と思った。  ・出た意見としては、非認知能力についてすごく勉強になった、もう少しそれを実践的に活用するためのことを知りたかった、例え話をもう少し出していただけたら理解が早かったかな、というところ。  →受講者の準備について、レディネスみたいなところで、イメージがわかない先生方により丁寧に、具体的な話、また、研修の全体像の明示化の必要性についてのご指摘をいただいた。岡山に向けて改善をはかっていきたい。（植上）  （２）沖縄研修の振り返り：小田→植上（補足）→近藤  〇ヒアリング司会による振り返り（小田）  ＜概要＞  ・8月22日13：00～16：00研修、講師は1時間目：植上先生、2時間目：丹田さん。  ・エアラインビジネス科の先生方が3名、エアポートビジネス科の先生方が3名の計6名で研修を実施。  ＜京都研修を踏まえて修正した点＞  ・京都研修の振り返りを踏まえて、修正した点について、大きくは4つあって、2時間目が中心。2限目は、非認知能力を抽出、分類、構造化するという内容になっている。そもそも京都では、ワークを後半でまとめてやっていたが、それだとワークの事例を紹介した後にワークをするということが、間が空いてしまって、頭に入りづらかったかなと思い、抽出の説明をした後に抽出のワークをする、というような順番でやっていたというのが改善点の1つ目。2つ目は、ワークの意義やワークのやり方を京都研修では明確にかけていなかったので、こちらを改めて書いて説明をするように修正。3つ目は、非認知能力をどのような要素から抽出するのかという点について、京都研修では、業界ニーズ中心で書かれていたのかなと思うが、そこについてこちら側が諸要素についての具体例の説明が足りなかったかなというところで、非認知能力の諸要素としてDPや学科のスローガンを具体的に話すようにスライドを修正し、併せて、ワークシートも業界やDPなどどの要素から書き出したと思うか丸「をつけるワークシートに修正。4つ目は、京都研修では、非認知能力の要素を見ていただいて、生涯学習研究所が出している言葉の定義出していたが、それを配布することで先生方がそれに合わせなければいけないとなってしまったので、それを配布せずに、先生方が考える言葉でいい、ということを伝えるようにした。加えて、近藤先生が事前にこの学科で大事だと思う非認知能力を4つ～5つ考えといてください、ということを伝えていただいていたので、おかげさまでワークもスムーズに進行できたと思う。  ・全体的にワークは比較的スムーズに進行できたと思う。  ＜ヒアリングにおいて＞  ・1限目に関して、1限目は、専門学校において、非認知能力を育成することの意味などについて考えていこうという内容。専門学校の「強み」をどう考えるか、という問いかけを先生方にしたが、「強み」という表現は先生方にとっては少し重いのではないか、新任の先生方にとっては少し答えづらいかもしれないので、専門学校って何だろうみたいな、問いでもいいのではないか、という意見。また、京都研修とも重なるが、具体的な現場レベルでの事例の紹介があるとより分かりやすいのではないか、というご指摘もあった。  ・2限目の改善点としては、1つは構造図の説明をしていたが、これはこれとして成立しているが、これだけを理想として紹介してしまうと、専門学校としては最低限どの力を身に着けてほしいかとか、成長させたいかとかいうときに、この力を全部持っていないとだめなのかという序列化ができてしまうことや、ここに達せない学生がすくえなくなってしまうのではないかということで、この図だけでは誤解を生んでしまうのではないか、というご指摘をいただいた。あとは、非認知能力の諸要素をDPとスローガンを例に話したが、その他入学時の学生の状況や業界ニーズの話は丁寧に事例を説明できていなかったので、その点も修正する必要があるのではないかという意見もいただいた。あと、グループワークの際に、グループの編成に関して、事前に考えていただいていたのでスムーズにだしていただいたが、グループの編成の中で上下関係があることは大丈夫かというところで、若い先生は年配の先生がここで育てるべき能力はこれだ、といってしまうと発言がしづらくなってしまうのではないか、というご意見も出た。ただ、一方で、研修の中で事前にワークシートを書いていただいているのであれば、それをもとに話せば、ある程度話しづらさは解消されるのではないか、というご意見や逆に年配の先生方が若手の先生方はこういうことに気づけていなかったんだな、ということに気づく機会にもなるのではないか、ということもあるので、グループの編成についてはひとまずこのままでいいのではないか、という話になった。  〇補足①（植上）  ・1時間目について、高岡先生から、青年期、青年にとっての非認知能力の効果ということをより1時間目で打ち出した方がいいのではないかという意見もいただいた。  ・岡山で実施の際には、沖縄のような事前学習、参加者の先生方に、こういうことをやるよ、とか、自分の学科で育てたい非認知能力のイメージってこんなもんだよ、とかを考えていただくようアナウンスいただけるとよりワークが進みやすいかなと思うので、お願いしたい。  〇補足②（丹田）  ・京都、沖縄ともに佐藤さんにアンケートを作ってもらって、受講者の先生方にアンケートに回答をいただいている。沖縄に関して、6名の先生方からアンケートを回収していて、ワークがircの方では盛り上がったというところで、ワークの時間がもう少しあった方がいい、という意見があった。そのほかは、気づきがあったなど肯定的な意見がもらえた。その他課題等についても記述をいただいているが、田澤先生のお話にもあったような、評価の部分、ご自身が持たれている授業の中での非認知能力をどう評価すればいいのか、というところで悩みを持たれているというところは、多くの方が共有して、課題に感じられている点なのかな、と整理をしている。この点についても、今後完成に向けて動いていく際にも、アンケートを活用していければと考えている。  →先生方が関心を持たれている非認知能力の評価について、4時間目の研修で扱うテーマになっているが、これを4時間目で扱いますよ、後の研修でやりますよっていう全体像を、あらかじめ示しておくというところを改善していきたい。（植上）  〇その他  ・今度、岡山でしていただけるので、沖縄で行われたような形で準備すべきことを準備するということだが、この事前学習が必ず本研修の中で必要になるのであれば、そこをプログラムの中に具体的にどのような形で準備をしてもらうかを入れないと、前回そう言うことをされたという話は来ているが、具体的にどのようなことをやったということはあの時には出ていないので、今回もしやるとすれば岩崎流のやり方になると思う。だから、そこの部分の当然どういう説明をして、どういう形の準備をしてもらうというところを入れていないといけないかな、というのが1点。それも、例えば、非認知能力っていうのが、これ配っていただいた資料のｐ34にある日本生涯学習総合研究所が提示している16の非認知能力の要素、この要素をもとに考えておくものなのか、それとも自己流で考えておくものなのか、という内容にもなってくるのかな、と思う。（高岡）  →近藤先生がどうされたのかな、というところ。（植上）  →沖縄のワークを見た感じでは、先生方オリジナルの言葉で書かれていたので、たぶんオリジナルで考えられたのではないかな、と。（小田）  →そのあたりも、事前の資料をどうしようかな、というところが悩ましいな、と。近藤先生に聞いてみる、どういうふうに説明したのか。聞いたうえで、どうするか。どうしたらいいか。（植上）  →岩崎先生はどういうふうにするつもりなのか。今、やります、という話になったけど、どういうふうにやるのか、ということがわかっているのか、というところ。あなたなりのやり方があって、それでやってというのであれば、これはたぶんそれぞれのやり方でやって、どうなるか、ということが試される。だから、あまりここでは決めておかなくてもいいのかな、と。今、僕が言ったことも、どっちをとるかは岩崎が考える、ということで、近藤先生がされたのはこうだ、ということをあまり意識せずにやってみるのもありかなと。（高岡）  →この研修の全体像を伝えないといけないな、とは思っている。漠然と、そこに入ったときにわかるのではなくて、事前にこんな研修ですよ、ということを伝えながら、学科の中での目指すDPに対する非認知能力っていうのが、どういうものなのかっていうのを自分の中で考えながらいうことは伝えないとかな、と。非認知能力は、OICでは認識しているはずなので、それも復習という意味も含めて。（岩崎）  →近藤がZoomに入り次第説明をさせる。事前に近藤の方が宿題というか、非認知能力についてのワークシートをもとに事前に考えておいた方がいいよ、ということだと思うので、内容については、近藤が入ってから説明を。（上里）  ・植上先生が1時間目の時に事例として話をされたことで印象的だったのは、1番最前列でいつも授業を聞く積極的な子が必ずしも成績が良いとは限らない、と、そのギャップを去年触れてきたと思う。それで、このアンケートを見ていたら、KBCの吉原先生も、おそらくそういう意味だと思うけど、実習型の授業の中で非認知能力はあるものの、実習結果が伴わないときに評価の仕方や思っていた以上に基礎的学力がない場合のクラス授業の運営の仕方に、難しさを感じていると。非認知能力を鍛えれば、成績が上がる、というものではないと思う。だから、そこをもしかしたら、説明の中でいるのかもしれない。授業を頑張ってもできない、いわゆる成績というもの、点数ではなかなか上がらないけど、基本的な人間力としては、この子はこんなに優れているんだ、というのが、1つそういうタイプの子にとっての救いになるのかな、と思う。成績がいい子が、より非認知能力を身に着けていくことはいいことだと思うが、なんとなくこれがリンクしないことで悩まれているのであれば、植上先生が離されている事例のような形で悩まれていると、それは無理な話だなと思う。だから、そこの説明がいるのかな、と思う。（高岡）  →パワーポイントに入れた方がいいか。（植上）  →あくまでこの先生がそういうように書かれているだけの話かもしれないけど。でも、非認知能力を上げて、この子は普段の生活でこんなにいいのに、成績が上がらないということで悩まれていると、ちょっと違うのかな、と。（高岡）  →ちょっと違う。その通り、だから、成績と非認知能力の関係性みたいなところについて、より説明を、誤解がないように、ということ。（植上）  →ちょっとこの子検定も取れてないけど、こういうところがあるんです、っていう部分ですくってあげたい、というのが1つのパターンなのかな、と。もちろん両方（成績と非認知能力）あるのがいいのは確かではあるが。（高岡）  →この話は、次の評価の部分とも関わってくるかな、と思っている。非認知能力を上げるために、何を評価していくのか、というところと、どういう評価基準を設けて、評価していくのかということが出来上がると、ここのすみ分けはできてくるのかな、と思う。あくまで知識として必要な部分は、授業の中でやっていくだろうし、点数化できる部分は、非認知能力以外での評価になってくると思うので、今点数化でいない部分が、プロジェクトの中に入っているので、それをどう評価していくか、というところが明確になれば、クリアになるかな、と思う。（上里）  →要するに、非認知能力をどう評価するのか、という点。（高岡）  →田澤先生がおっしゃってくださった点とつながっていると思う。非認知能力をこの研修で扱っていくことの意味、そして全体像、それが4限に回収されるということを含めて、1時間目で明言しておくということを改善点として取り入れる。（植上）  →認知能力と非認知能力は、相関が必ずしもないわけではないし、むしろ相関があるが、遅効性があるというか、即日的な連動があるとは思えない能力なので、それを理解してもらうことは必要だと思う。一般的に先生方が言っている「成績」は、認知能力のところが知識・技能で成績としてとらえがちだが、我々が育成しているのは、そうではない非認知能力も育成しているんだから、それも学習成果として見られるようにして、可視化するようにというところが今回のテーマなので。そこがごっちゃにならないように、そこが整理できていないような気がした。（岡村）  →認知能力と非認知能力の相関は研究ベースでも明らかになっている。それがすべて信用できるものかどうかというところは、怪しいものもあるが、典型的なものとしてはビッグ5だとか、比較的ビジネス経済的な成功とか、社会関係構築の中での成功とか、有効とされるような非認知能力とかがあるので、いくらか相関があると思う。ただ、先ほどから高岡先生がおっしゃられている、その相関がある、ということ自体に対する理解と、それをどう評価で利用するのか、というのは、その評価をどう学生に戻すのか、という可視化した学習成果の利用目的の違いみたいなところも、踏まえておく必要があるのかな、と思っていて。職業上その非認知能力が相関も強く、パフォーマンス上重要で必要だ、ということであれば、ある程度掘って積極的にフィードバックして、伸ばさないといけないというものもあるのかもしれないけど、ものによっては、個人の動機付け目的や、個人の承認してあげるという文脈で、非認知能力を評価の軸として利用するということもできると思うので、そのあたりは、どういう目的で非認知能力を評価するのかにもよって、必要な評価の粒度っていうのも変わってくるのかな、と思う。（佐藤）  →3，4限の開発とも関わってくるので、またあとで、ご指摘、説明をお願いします。（植上）  〇研修実施校の教員による振り返り（近藤）  ・KBCで検証研修を実施して、参加した職員からの振り返りとして、普段の業務の中で非認知能力について考えることや、それをどう評価や目標に掲げて授業実践とか評価するか、という点で、普段使えていな部分も実感としてあったようで、個別に職員に話を聞いていっても、そういった点が気づけて研修とか、自己研鑽を重ねて、より深めていきたい、という声を聞いた。  ・研修の中身に関して、研修だけではなく、研修の後も話し合いを継続したいという声もあった。今回の対象となった2つの学科の1つは、昨日、一昨日と2連続で5時間くらい時間をとって、能力についての話し合いを行っていた。研修を受けることによって、必要性やもっと理解を深めていきたいということが高まって、実践につなげ切れているという点、すごくよかった。  ・3章以降で出てくる目標や評価とかを、この時点で意識している先生もいたので、3章に向かうにあたっての、1章、2章の並びがすごくいい形になっているのではないかなと思う。  →研修の後に5時間の振り返り、継続的な学びをしていただいたという点、すごくありがたいなと思う。どういう議論がされたのか、どういう形で進められたのか、という点について、ぜひ今度教えていただきたい。（植上）  →大まかには、前回の京都での検証研修後の振り返りの場で話題に上がっていたことが出てきていて。学生の様子を見て能力の必要性を感じるのか、DPから意識するのか、とか、という意見が結構あった。（近藤）  →ぜひそのあたりまた、メモなどで共有いただけるとありがたい。今度岡山で、研修をする際に、沖縄でどのような事前準備をされていたのか、という点について、共有してもらったうえで、岡山で実施したい、という話になっているので、近藤先生がどのようなアナウンスをしたのか教えてほしい。（植上）  →昨年度まで、ホテルブライダル科の職員を中心にARや検証研修をやってきたが、今年度からエアライン系の学科に変わったということで、今までの簡単な取り組みを紹介と今こういった事業でこういったプログラムを開発しているということを紹介したうえで、非認知能力に関する研修を実施という部分と、ちょうど直近で京都の研修を見たところで、うちの職員だと5つの能力を書きだすとか、ワークのところで時間が足りないんじゃないか、ということが直感であったので、それを先に、能力とか非認知能力みたいな言い方はしなかったが、知識・技能以外で学科において○○力、○○性ということで重要視しているものがあれば、5つくらい書き出してほしい、と。それについては、当日、研修講師に提出したり、発表したり、ではなく、それを材料、ヒントにワークに活用できれば、という伝え方を。ワークシートを簡単に模したものをワードでメモかけるようなものを配布して、だいたい4、5日前くらいに配って、当日研修を迎えたという形。（近藤）  →高岡先生からご意見いただいたのは、このプログラムを普遍化していくときに、事前学習でどのようなことをやっていったのか、ということを共有していった方がいい、ということになっているので、近藤先生が何をやったのかというのを、資料で蓄積していきたい、どういう資料を配ったのか、どのような声掛けをしたのか、とかの資料の共有をしていただけると、ありがたい。（植上）  ・今後の1，2時間目については、岡山での最終の研修をして、9月の下旬までにパワーポイントを完成。事前学習についても、近藤先生、岩崎先生のものを共有しながらいければ。岩崎先生も実施後に、資料等で共有いただけるとありがたいな、と思う。それらを踏まえて、9月の下旬までに、1時間目を植上、2時間目を丹田さんにまとめていただいて、完成版として共有していきたい。（植上）  ３． 研修プログラム3時間目・4時間目の構想について  （１）3時間目・4時間目の構想についての説明（佐藤）  →「研修プログラム3時間目・4時間目の構想について（佐藤）」の資料を基に説明  ――以下、資料の文章のみ引用して記載―――  〇構想の方針  植上先生が作成された「手引き」の４章・５章（※ページ下部参照）のポイントをふまえつつ、  ・６月末の WG でのディスカッション内容  ―授業実践、シラバス・コマシラバスの目標設定…が内容的に適切か？  ―評価そのものだけでなく、評価したものをどう学生に還元するかという視点  ・２校での研修実施をふまえた先生方からの質問やコメントの状況  以上の２点をふまえ、３・４限目の研修内容（案）を検討。  〇元々の「手引き」を参考に研修用に加筆修正したポイント  １．非認知能力を育成・評価する多様な場面（ボランティア・清掃等）や時間軸を想定した  　　育成・評価デザインが重要であることがわかる≒授業実践に閉じない  ２．「評価」することには負荷も生じるので現実的に実行できそうなデザインを行うことが重要  　　であることがわかる（非認知能力を育成・評価するポイントをどう焦点化するかの事例共有）  ３．非認知能力を評価する手段として具体的にどのような評価方法があるのかがわかる  ―先行研究などで明らかになっている評価方法やそこから得られた知見 〇現段階の３限目・４限目の構成案  3 限目：教育活動のなかで非認知能力を育む  １．抽出・分類・構造化した非認知能力を「どこで」「どう」育むか？  〇非認知能力を育む多様な専門学校内の教育場面  （授業だけでなく正課外のボランティア、清掃なども含む）  ・ある特定の状況・場面で必要な能力を再現性高く発揮できるか  ・「習慣」から「コンピテンシー」への引き上げ  〇教育課程と各授業・活動の関係性を意識して非認知能力育成を位置づける  ・正課授業だけでなく、正課外活動を含めて全体的な育成計画をデザインする  ＊コラム：先行研究紹介：誠実性を高める指導介入  （学習機会）前向きな目標設定・達成、自己管理、責任ある意思決定  →誠実性（課題にしっかり取り組む）→（経済的側面、健康的側面、社会的側面）  ２．（検討中）非認知能力を教育活動全体の中で育成するためのデザインを考える  〇活動内容の特徴を考慮した到達目標の設定と非認知能力を位置づけのケース紹介  ・ケース紹介：一般の授業  ・ケース紹介：インターンシップ系  ＊コラム： 育成主体が外部。「現場のリアル」の体験に流されることがある。  学校として明確な目標・水準を示すことが重要。  ・ケース紹介：正課外教育（ボランティア系）  〇ワーク：自校や学科の教育活動を振り返り、もっとも重視する非認知能力を  どこで育成すべきか自分なりに「コア授業」「コア活動」を明確にしてみましょう  ４限目：教育活動の成果としての非認知能力の可視化とフィードバック  １．教育活動の成果としての非認知能力を可視化するための学習評価  〇非認知能力をどのような時間軸・粒度で評価するか ？  ―基準レベルで評価する必要があるもの・観点レベルで評価したほうがよいもの―  〇教育活動で用いる学習評価の種類について  ・相対、絶対、個人内評価  ・診断的、形成的、総括的評価  ２．非認知能力をどのように可視化するか？  〇複数の評価を組み合わせて可視化する  形成的評価や総括的評価を組み合わせる  学生個人・教員・企業の３者の評価のギャップから考える  ＜具体的な評価方法＞  ・評価シート、学習ポートフォリオ→凝集ポートフォリオを用いた評価  ・先行研究などで公開されている既存尺度を用いた評価  ３．可視化した評価をどうフィードバックするか？  〇可視化した非認知能力をフィードバックする際の注意点  ・能力・特性とスキルの違い  ・非認知能力の各要素ではなく全体に注目する  （例：誠実さ低いが、社交性は高くサポート調達が上手い）  〇フィードバックの種類と目的  ・シラバスの到達目標に対して必要な非認知能力をどれだけ高めたか到達度に対する FB  ・獲得した非認知能力の意義や広がりを伝えるための FB（ビッグ 5）  　―獲得した能力の広がりを伝える―  ・学生の自己認識を深めたり、自己肯定感を高めたりするための FB  　―ひとりひとりの豊かな個人差を捉え、個人内変化に注目する―  〇ワーク：今自分が採用している評価以外にどのような評価の可能性があるかを検討してみよう  （新たに評価を加えてみるとしたらどんな評価を加えたいか、試したいか）  ＜おわりに＞  【事前調査で取得すべき情報】  ①現状非認知能力をどう評価しているかその難しさ、何が負荷になっているか  ⇒実際にその評価を運用していく上での課題を調査する  ⇒もしコア科目、評価する活動の絞り込みなどの例があれば知りたい  ②具体的に現場ではどのような方法・ツールで評価を行おうとしているか？  ③評価した内容を活用してどのような目的でどのような FB をしているか？  ――――――――――――――――――――――――――――――  〇補足（植上）  →当初、予定していたのが、ある授業の科目における目標や学習評価、成績評価の仕方を見ていこうという話をしていたが、それだと実情に合わないのではないかという話になり、佐藤さんに題していただいたような案に、研究者グループではなった。先生方のご意見を踏まえて作っているつもりではあるが、かなり形が変わっているので、質問、アドバイス含めていただけるとありがたい。今回いただいた意見を基に、また9月中に、研究者の方で話し合って、次回のWGの方に、骨格と要素を詰めたものをお示ししたいと思う。  （２）質疑応答・補足  ・ワークは挟まずに説明のみ、になるか。（岩崎）  →ワークはそれぞれの時間の後半に予定している。説明ぶっ通しではなく、話しながら質問とかを振りながら、進めることにはなると思うが、基本的に前半のところ説明しながら、資料の〇ごとに質問を挟みながら、最後に大きめのワークを挟むという形で構成している。（佐藤）  →難しいという印象がある。（植上）  →うん、難しい、と捉える感じがあるかな。ワークシートみたいなものがありながら、説明をしていただいてという方が入りやすいかな、と思う。（岩崎）  →ワークを増やした方がいい、と難しい要素があるということ。（植上）  ・非認知能力について、いろいろな角度から必要性や期待度とかが高まる内容になっていると思う。シンプルに最終的に何ができあがって、それをどう活用するか、というところがまだピンときていない。何をするかはわかるが、何ができあがって、それを活用するというところがなかなか想像ついていかなくて、その辺はどうなっていくのか。（高岡）  →1番大きな成果物は、3限目のどこで育てたい力を育む必要があるのか、みたいなデザインを創っていただくのが、1番大きな成果物かなと、思っている。なぜならば、評価方法に突っ込むとなると、モノによって種類がかなりたくさんになるため、どこに焦点化した方がいいのかは、先生方の意見をお聞きしたいところだが。評価方法をどう組み合わせるかがすごく重要だ、ということであれば、例えば第1期、第2期、第3期とあるその各段階でどういった評価が必要で、とかを。評価ツールまで踏み込むかどうか、というところを非常に悩んでいるところ。そこの作成までいくと4時間目がかなり重たくなる可能性がある気がしていて。今は、指標としてはこのようなものがあって、このようなシートがあってとかをご紹介して、どこで使えそうなのかとかを考えていただくということを着地点として考えている。（佐藤）  →そこで提示されて初めて、理解して、時間的にかなりきついだろうな、と思う。すごくいい内容だと思う。1番の悩みは、人間性だ、と言いながらそこを育てているが、どう評価できるのか、という点で躓いていて、どうしてもそこを求めると思う。理解は深まるが、なにが正解なのか、という点に近づいていかないと、完全な正解はないと思うけど、今までよりは何となくでもわかってくれば、それが完成なのかな、と思うけど、そこまでいくのかな、と。理解して終わりのような気がする。すごくいい勉強はできると思う。（高岡）  →1番最後の目的によって評価の仕方は変わるかな、と思っていて。目的で使っていくのか、4限目の内容と3限目の内容の順番とかを考えてもいいのかな。具体的に何をするのか、というところがなかなかワークをしながらでないと理解しにくい内容なのかも。どういう目的で非認知能力を評価しているのか、ということを考えていただいたうえで、そのために適切な評価は何なのかということを考えていただく方がいいか。（佐藤）  →研究者ミーティングで議論になったのは、当初の手引きは具体的な授業1つ設定して、その授業で目標を作って、2つくらいのパターンで学習評価のやり方を紹介していくというやり方だとシンプルでいいよね、と思っていた。例えば、個人内評価をやっていくという点、授業前の診断的評価をやって、いくつかの授業で設定した目標、例えば「気づく力」でもいいが、事前の評価として個人面談をしてみるとか。そして、実際に終わってから個人面談をするとかポートフォリオを作るとかで、ここがこう伸びたよね、とか、このような使い方があるという1つのパターンとか。もしくは、評価シートを使ってみるとか、この授業でこのような非認知能力の要素をルーブリックとかを参考にしながらやっていくと、良いというパターンがある、というだいたい2つくらいのパターンを各授業で使っていけるというのが想定してあって、手引きを作っていたが、すべての授業でこれをやるのは無理がある。1年単位でやる、特別な授業で設定するということの方が現実的だよね、という話になった。そうなったときに先生方に考えてもらった方がいいのは、専門学校が2時間目で設定したような自分の学科で育てたい非認知能力の要素をどこで育てていくのか、どの段階で、コアとなる授業はどこなのか、というところを考えてもらった方が、いいよね、というところが3時間目のところ。これを授業で置くのか、インターンシップ系で置くのか、正課外で置くのか、ということ、そして先生方がどの観点で置くのか、つまり職業で必要な非認知能力はこうだから、という場合と、高岡先生が常に言っているように、若者たちのそれぞれの成長をちゃんと把握して、FBしてあげたいということと、いろいろな目的によってはかり方は違ってくるし、適切なツールも変わってくる。そして、それをわかっていただくということが大事ではないか、ということがこの前の研究者のなかで議論になったところ。わかってもらうというところで、説明が中心になるということと、そこの説明が多くなると、実際にどれ使えばいいの、とか、使ってみようというワークが少なくなるという弱点もあるのかもしれない。（植上）  →先生方からふられている質問は、結局この時間の後に、参加者は何ができるようになっているのかを明確にしたいということかな、と思ったときに、3限目はシンプルで、どういう時間軸でどこに焦点化して絞るのかを考えられるようになるという、その形でどうかと思っている。4限目になったときに、3限目で設定したデザインに沿って適切な評価ツールをどう置けばいいかかみたいな話を持っていければいいかな、と。そのための選択肢は4限の中で示そうとは思うが、こういう尺度がある、こういう評価ツールがある、とか。それを自分なりに組んでみるというか、3限目のデザインの方にこのタイミングでこの評価ツールみたいなものを置いてもらうことで、少し今までの評価し方だとか、評価の仕方を広げていただくみたいなことを考えていたが、ちょっとまだ抽象度が高いのかなと考えていた。（佐藤）  →もう少し組んだ方がいいのかな。（植上）  →植上先生はそうだよね。植上先生は組んでしまって、パッケージ化してこういう感じとして示した方がいいのではないか、という話だと思うが、ひょっとしたら、そっちの方がよかったのかな、と。（佐藤）  →非認知能力を限定的にどこかの科目だけで養成できるものではないという前提は、は伝えなければならないと思う。佐藤さんが言われるように、正規教育外でも、その育成はあるし、正規教育の知識ベースの教育の中でも、ちょっとしたチップスで育成する活動という学習方法は提供できるよ、と。そういう全体像の中で、まずは今回皆さんがやっている教育活動のここで非認知能力を育成していくとすれば、それはどういう評価方法をとるか、というフレームの説明は必要だと思う、そのうえでやらないと。学力の3要素というのを小中高で言っているのだから、その中で、英数国理社じゃないところの学力というものを提示されている以上は、それをどこでどうやっているの、どこでどういう評価項目を私たちは提示するの、と。小中高もやっているよね、それを私たちはどこでどうするの、っていうところの提案を私たちがするのではないかな、という気がする。（岡村）  →どこでどうするのか、というところも提案するということ。聞き手に任せるのではなくて。（植上）  →フィールドとして、それだけのものは教育プログラムとして、持っているということは伝えておかないと。どこをとりあえずここは評価する科目としてやるのか、というところは、それは非認知能力を育成するための、というか、育成するための定点の数、観測するための科目を、例えばキャリアデザイン科目を作っている、とかだったらそれでやればいいと思うし、ブライダル研修とかっていうのでやるってなら、それでもいいと思う。でもそこにも知識ベース、技能ベースもある、数値化できる。それと非認知能力は合わさっているから、これを統合して1つの科目評価をする、というのは非常に難しい、ということも知っておいてほしい。（岡村）  →認知ベースの能力が変化した背景に非認知能力があることも。個人カルテを作ったこともあった、1年間追っかけるみたいに。評価ツールとそれを使ってどういうコミュニケーションをとっていくのか、みたいなとことか、その過程でどのような情報を取っておけばいいのかとかを示されると、よいのかなと。高岡先生の話のなかで、授業の場面とか場面規定は必要だろうという話だったので、あとは場面と注目する能力みたいなこともある程度気にしないと、評価ツールの話はしづらいかな、と思う。（佐藤）  →私たちからすると、教授法とか、学習者の学習法によって非認知能力の育成が見られるわけだから、そこのところの因果の説明をやっていかないと、同じことを知識ベースで身につけてもらうにしても、手法によっては、そこには非認知能力の育成するプログラムになっているということの自覚が先生方にある必要があると思う。（岡村）  →非認知能力を実際に評価する人って誰か。授業担当者か、担任か。専門学校で優先度が高いのは、非認知能力を意識した方がいいのは、誰になるのか。（植上）  →個人的には、担任だと思う。個人のセルフモニタリングした評価と、担任が突き合わせて自覚していくものかなと。非認知能力は、優良を見るものではなくて、個人の成長を見ていくものだから、統合したものを見られるのは、担任だと思う。（岡村）  →そうだと思う。担任の力量による。（高岡）  →だから、評価方法とかツールを作りましょう、ということ。（岡村）  →アンケートを見ていても、自分の非認知能力の評価の仕方が正しいかどうかの自信が持てないというのが1番多かったと思う、だから、本当にそこだと思う。これを学問的に取り上げないと、できない人ばかりではなくて、最初からできている人もいる。その人たちが何をやっているのか、というのが本当は1番だと思うけど、その人の真似をするだけでできるようになる話でもないし。何点を取るというよりも、そこに近づいていくものにあればいいのではないかな、と思う。（高岡）  →今回の研修は、学校、学科として非認知能力というふわっとしたものを言語化すると、うちはこういう言語化した能力を重要視している、それを評価するとしたらこういうルーブリックのような評価観点の中での項目があって、段階があるという規準がある、と。これを皆さんが作れると、A先生とB先生で同じ観点で、評価基準で評価することができるよね、と。どうしても感覚が残りはするけれども、とりあえず、そこはあるよね、と。（岡村）  →近づけることはできるよね。グループワークをKBCさんしか見ていないけど、同じ言葉でも違う捉え方だとか、もっとそこは近づいてくると思う、あの議論だけでも意味はあるし。佐藤さに説明してもらったことは、学問として知るべきこと、知っておいたらいいな思うところがあるが、迷う人たちの解決にはならないのかな、と。ある程度能力がある人が聞けばよりそれを活かすことができるが、そうでない人からしたらより悩みになってしまうかな、と。（高岡）  →今のお話を伺っていると、冒頭でいただいたようなワークシートベースであったほうがいいという話を踏まえると、4限目は評価シートを実際に作るとかいうタスクが中心の方が、作ってみるという方がいいのかな。そうだとすると、学科コースで重要な能力を絞ってきた、それをどの場面で評価することが教育課程上、シラバス上有効そうなのかをみんなで考える、その辺が3限目。4限目は、今度それを評価シートに落とすとなると、基準作りをやらないといけない。その基準を決めたコア活動、コア科目とかの中で、どういう行動ができていれば、とか、ある程度状況とか場面を設定して、何ができていれば、3なのか、４なのか、とかいうのを振り分ける。アセスメント開発のプロセスだと、行動指標のどうてん（？）みたいなのをみんなで集めて、振り分けたり、ラベル付けしたりする。そういうワークをして、基準作りをするという方が、実質的で意味がある、とかという感じなのか、岡村先生は。（佐藤）  →私はそう思っている。学習評価でこの3カ年がスタートして、非認知に落としていっているわけなので、学習評価をこのように作るんだ、というところが分かることが必要だと思う。表現力とか観察力とかコミュニケーション力とか抽象度が高いものについて、具体的にどう違うと我々が求めるプロフェッショナルなのか、一般的なコミュニケーションなのか、社会人として必要なコミュニケーションなのか、その違いってこうだよね、ということをルーブリックなどで表現できると、ここが違うんだ、とかはあるのかな、という気がする。（岡村）  →やるべきタスクというか、先生方が一番関心を持たれているところが分かってきた。とすると、行動指標をどう収集するのか、それをどうラベル付けして振り分けるのか、とか手続きみたいなこととかが4限目のコンテンツには入っていった方がいい。だから、もう少しアセスメント開発よりの話をネタとして入れていくみたいなイメージなのかなと思って聞いていた。（佐藤）  →具体的にどういう使い方ができればいいのかな、というところで、私が勝手に思っているのは、これは成績として外に出すものではないというのが前提。だから、誰と比べるものでもない、この子がその1であろうと、1から2に上がればそれを評価すればいいし、逆に最初から5の子が他のところを努力してあげていくための指標であればいいと思う。それがガイダンスの時に話ができて、あなたはこういうところを、具体的にこういう行動をとってみようよ、とかそういうガイダンスのネタになればいい。成績としてどこかに出すものではなくて、活用はあくまでこの子にとっての指標でしかなくて、誰と比べるものでもない。そういう使い方なのかな、と思う。あくまでガイダンスをするときに、この子は具体的に何をすれば、自分自身が活かせるのか、というところを相談に乗ってあげる。それが、先ほど岡村先生が言われたように、担任ができないといけない、担任ができることが1番だし、多くの場面を見るのは担任なので。（高岡）  →今の高岡先生のようなものは、他の先生も期待されるでしょうか。先ほどの資料のFBの3つ目（＝学生の自己認識を深めたり、自己肯定感を高めたりするための FB ―ひとりひとりの豊かな個人差を捉え、個人内変化に注目する―）のところ。子に対する自己認識だとか、FBを深めるための目的で評価するということであれば、直前に申し上げたような1～5のような5段階のような行動指標を収集して振り分けて、みたいなことよりも、どちらかというと基準よりも規準の方、「観点」その観点ごとにどういう場面で見取ってあげる必要があるのか、とかを洗い出しておいて、集める情報が変わってくるなと思って。（佐藤）  →２種類提示するのはありだと思う。それを総合するのは大変。1つのシートとして作るのはすごく大変だから、2種類かな、という気がする。（植上）  →うん。少しずつ整理でき始めている。（佐藤）  →岡村先生と高岡先生が言っていることは、共通しているところもあるけど、違うところもある。（植上）  →わからない。僕はあくまでこう捉えている、という。（高岡）  →基本的には、非認知能力というのは、誰でもない自分自身が評価すればいいと私も思っている。ただ、第3者の目として統合的に見ている人として担任という専門学校の総合のメンターがいるから、その人が評価することで、形成的評価として彼がさらに成長していけるきっかけがあるのではないかと、そこは一緒。（岡村）  →両方とも大事だとすごく思っていて、議論になってきたのは、職業世界で必要とされる、プロフェショナルとして必要とされる非認知能力はあるはずだっていうのが１つ、ともう1つが青年としての成長をどう評価してあげていく、人間力とかっていう言葉で評価していくっていうことは重なる部分はありながらも、やっぱり違う観点として見ていく必要があるというのを、ずっと強調されてきたと思う。ルーブリックとかっていうのは、どちらかというと職業世界で必要とされるような行動の仕方みたいなことを、いろんな文脈で点数化というか段階化していくということになるし、一方で、この子はこういうところが伸びたよね、みたいなとことか、こういう形で評価してあげようね、という話は、こっち側から話すこともできるけど、いろんな観点を担任や教員が持っていかなければいけないことなので、ちょっと違った側面があるかなと思う。（植上）  →そこは物差しとして、5段階評価なら5段階として、1番レベルの高い5というのが、我々が思う社会で一般のプロフェッショナルとして通用するような分かりやすい表現力というのは、こういうことをすると分かりやすい表現力として、プロとしても通用する、と。でも、表現力として分かりやすいっていうところが、最低限一般の表現力として、こういう表現の仕方をすればいい。こういう段階を持つと、言語化されているから、じゃあ私はもう少し意識して、分かりやすく説明するためにこんなことを意識して、クラスで発表しようかな、とかってしていくことで、プロに成長していく。それを自己評価していくことで、1年目の入学したときは全部1だったけど、2年になったときは、3～4になるくらいには頑張ったかな、と本人が評価した、とすれば担任の方が総合的な評価としてよくわかっているよ、と、4近くまで来ているよね、けどこういうところもっとやった方がいいよね、とすることで行動評価がされるのではないかなと。（岡村）  →今、岡村先生が言われたことは、僕もそれでいいと思っている。プロフェッショナルの層のことをより伸ばすものなのか、それとも勉強ではなかなか活躍できないけど、人間としてすくっていくという部分で見るのか、というとこれは基本的には成績の上下みたいなことになるけど、両方それぞれにどうあがっていくかを見ていきたいというのが我々の思うところだと思う。みんなが同じところを目指しても、そこに届かなかった子がダメなのか、ということになるわけで、そこだけは避けたい。（高岡）  ・研修の1，2限目は、非認知能力ってこういうもので、すごく大事なもの。専門学校で専門職を目指す学生にとって必要な非認知能力はどのようなものがあるか、ということを抽出していって、それは専門職という職業的に、もしくは社会的にどのような場面で必要なのか、ということを分類していって、さらにその優先順位はとか、どの程度必要なのかとか、最低限このくらいだよねとかで構造化していくということが1限目、2限目。そこまで、知識とかそういうことを理解したうえで、3限目、4限目という順番で合っているか。（田澤）  →そう、その通り。（植上）  →で、その3限目のときに。（田澤）  →優先度が高いものをどこでどう組み込んでいくのか、というのが3限目。（佐藤）  →優先度が高いものをどこでどのように組み込んでいくか、それが課外活動だとか、ある意味教科の科目で合ってもいい。で、例えばそういう科目をピックアップして、4限目で、具体的にどういうことができていたら、どういう評価をしていくのか、ということをやる。（田澤）  →4限目は、優先度が高いものをこのポイントのここを使ってみていくという、ポイントは3限目で決める。それはどういうステップで育ってほしいのか、みたいなことがある程度段階的なものを想定する必要があると思うが、どのタイミングで、例えば模擬挙式場面で見る、その場面で見られる、見たいコミュニケーション能力と、施設見学レベルで見たいコミュニケーション能力の水準は違うと思っていて、それぞれのポイントでの全部は無理だが、1個サンプルを規定して、その場所での評価基準の作り方とか手順のところにフォーカスして4限目を組むみたいな。（佐藤）  →教科に組み入れるとしたら、評価するのは教科担当になると思う。担任が、その子の非認知能力の伸びを見る機会は、相当意識しないと難しい、負荷が大きい。（田澤）  →相当難しいと思うので、相当負荷が高い。毎回見られるものではないので、どのタイミングまでにどういう情報を収集しておいて、見るかみたいなトータルデザインとか焦点化とかが、非認知能力の評価では重要だと思っている。（佐藤）  →去年担任をしていた時に、このレベルまではできなかったが、社会人基礎力の表一覧を学生に出して、それを自分がこの1年間で伸ばしたいと思う能力どれというのを聞いて、そこに軽く段階が書いてあったので、面談の度に、入学の時１だったけどどれくらいになっていると思うというのをやっていた。それは私が評価という訳ではなくて、あくまでも学生の個人内評価として。なので、担任は、そういう話ができるのかな、と思うが、職業人として必要な非認知能力を教科の中に入れたら、教科担任が評価するということになる。（田澤）  →そうなる。教員の側が評価の軸を握っているから。ここまで来てほしい、っていう。（佐藤）  →どっちかでないといけない、ということではない。（田澤）  →評価の目的、可視化したものをどういう目的で使うかによって、先生がおっしゃっているようにある程度教員側がFBして突き合わせて、その差を見ていくというような使い方は発生してくるかな、と思う。（佐藤）  →理解した。（田澤）  →YICのシラバスのガイドラインを作ったときに認知的領域から、行動領域、情動領域の科目の中の評価配分というものを何で取るのか、試験をしてどういう評価の割合にするか書いて、と言った。だから、情動評価はどちらかというと非認知能力。その割合を科目で入れるのであれば、入れるなりの試験の内容が必要で、ペーパーだけで見ることはできないよね、ということ。だから、日常の学習の動向でそれを見て、評価に入れてね、ということになる。（岡村）  →教科によっては、認知能力のみの評価になる科目もある。そこまでは理解して、整理できた。（田澤）  →3限目で決めたコアとなる活動とか科目とかのある程度固定された状況の中で、どういう行動を重点的にみていかないといけないか、みたいなことを先生たちで出し合うみたいな、何となく仏様相なワークなのかな、と思った。（佐藤）  ・非認知能力について職業実践的なところになると、専門科目を担当している教科の先生が評価の中心になるのかな、と思った。あと、人間性教育のところで、職業業界だけにとらわれず、社会にでて社会人として活躍し続けるというところで、社会人的な面と非認知能力というところでは、授業の様子だけではなく、学校生活全体を見ることができる担任の方が評価しやすいだろうと思っていた。構造的、段階的というか、どういう授業、ボランティアとかイベントで見ていくかというところ、それぞれの学校とか学科で事情が様々なんだろなと思っていたので、例えば前段でこういったワークとか単元に入る前に、職業実践的な部分で一科目の担当者として、こういった部分の評価とか非認知能力とかをどう捉えていくかみたいなところで、この研修に入っていってください、とか、もしくは、一般的、社会で広く必要とされる非認知能力について、チームでは捉えていきたいと思うのであれば、そのように進めていってください、みたなちょっと前段で説明を入れてみるとか。数あるものの中で、一番学科・コースで重要視している授業科目でもいいし、イベントとか、それを1つ例に今回はこのチームでワークを進めていきましょうみたいな感じにして、で最後に、今回は1つに絞ってやったが、実際はそうではないはずなので、今後、この研修で得たものを活かして科目数を増やしていく、イベント数を増やしていくとか、最終的には、教育課程全体が非認知能力の到達目標とか、評価とかを形づけるものができるようになっていくということを見据えてやるような研修として、説明をいれていくのはどうかなと思った。あとは話が変わるが、この研修を受けるにあたって、受講者がどういうものを持ち寄ってくればいいのか、という点を考えた。前回の検証研修のときに、各自が5つの能力を考えて持ってきていただいたような形で、どのような準備があればいいのか、ヒントがあれば教えてほしい。（近藤）  →今思ったことは2つ。要するに、条件設定というか、状況を考える上での条件設定をある程度限定する、仮想でもいいので、決め打ちした方が取り組みやすくなるのではないか、ということ。そうしたときに、今回も4限目の内容とかはある程度考えてきてもらわないと、なかなかワークが進まないかもしれないので、内容を事前ワークとセットで練り直したいと思う。（佐藤）  ・3限目のところで、デザインを考える、というところがある。それをしっかりと考えていれば、科目担当が入っていくと思うが、科目担当と担任が意思統一、それが指標として分かると思う。そこを踏まえて担任は、その子がどう成長したのか、というガイダンスに結び付けると思うし、科目担当はこの子がプロとしてどこまで成長しているのか、というところを測れると思うので、しっかりと指標を示すことによって、4限目につなげられるのではないかと思う。（岩崎）  →そこが肝だなと思う。（植上）  ・こうやって議論を重ねることで、何が必要なのかということが出てくるなと思った。個人的には、非認知能力のところに関して1番重要なのは何かということになってきたときに、学生自身も自分がどう非認知能力が高まってきたのか、ということが分からないことには、意味がないのかな、というところ。それをするには、1，2限目でやっているような担当学科によって何が1番必要な非認知能力なのかという項目のすり合わせと、この項目がどういうレベルまで必要なのか、というのは、該当する学科の教員が情報を共有しておかないと、日頃の学生指導、授業によってそこで差が出てくると、学生たちがどこに向かっているかが、分からなくなるので、まず項目のすり合わせが出てきたときには、共通認識をそれぞれの教員同士でやらないといけないというのが、1，2限目だったのかなと思っている。それが出てきたときに、うちの学科の非認知能力ってこういうことで、例えばコミュニケーション能力だったら、このコミュニケーション能力がどの教科、どの場面でということが先ほど話に出ていたが、そこも学生に共有しておかないといけないはずだし、あとスタート時に学生が自己分析をしておくことも必要なのかなと思った。高岡先生がおっしゃっていたが、スタート時がどうであって、最終的に自分がどういうレベルまで来ているのかというのは、個人の差によってあると思うので、個人の成長度を学生が認識すると同時に、最後には学生と教員同士がFBをどうすればいいのか、というところで、学生と教員がお互いに学生の成長はこうだったよね、ということが共有できれば、学生の認識にもつながっていくかなと思った。だから、ポートフォリオ的な評価に値するようなものが必要になるのではないかと思った。（上里）  ・的外れになるかもしれないが、おそらく2年という課程で、いろいろなフェーズがあるかなと思う。例えばクリエイター系の学科だと、最初の半期が基礎の養成、1年の終了時点で終了したことに対して作品作りが入る。また同じパターンで、卒業時に卒業作品を作るという形で授業は組み込まれている。1年の終了時点でやっていることと、2年の終了時でやっていることというのは、レベルも違うが、同じようなフェーズでやる。その段階で、非認知能力的なところは、同じようなフェーズでやるっていうところで比較できるという要素があるのかな、と。それは各学科等でも違うと思うが、そういった再現性があるところで、期間を区切ってみていくことが大事になるのではないかな、と感じた。話がそれるかもしれないが、うちの同僚が育休から復帰して帰ってきたときの第一声が「痩せましたね」と言われた、実際に痩せたんだが、ずっと見ている人だと気づけない、何か月間か間があって改めて見たから変化に気づけた。非認知能力についてもそういう面があるのではないかと思っていて、担任なのか科目担当なのかという話があったが、例えば科目をずっと教えている人だと見えない、さっきのクリエイターだと発表会とかプレゼンの機会とかに担任が参加する、場合によっては科長が参加することもあると思うが、そうやって一旦離れている人が見ることで、その人の成長に気づけるところもあるのかもなと思って、どっちがというところを見ていくときの視点として時間軸も入れていくというのも1つの手かなと思う。（水田）  →それを教師が把握するためにも、必要だと思う。ガイダンスをするうえで、前回こういう話で、こういうことになっていたけど、変化を覚えている教師はいいけど、それを全員が覚えているかというとそうでもない。そうするとこういうものを持って、最初こういう話をしたよね、というそういうのができるようになると思うし。変化を捉えるためにも記録もいるし、前の評価も指標として必要。すごくそうだと思う。（高岡）  →先生方からいただいた意見を基に、佐藤さんとか私も含めて議論していきたいと思う。（植上）  ４．事務局から（飯塚）  ・予算執行上の問題。ARについて、京都、沖縄、岡山に2回ずつ行くという予算が立っている。現状は前半戦の研修を行ったと同時に、AＲを1回やっているので、1回はクリアしたと理解している。2回目の日程をどうするか、と、やるかやらないかという話。この辺が大きく予算に関わってくるので、明確にしていただきたい。事務局として想定しているのは、今、田澤さん、近藤さん、岩崎さんを中心に学校の先生方チームがあるので、そこに対して何名かを派遣してARを実施する、もしくはオンラインでということを考えている。  ・富山の研修が10月26日の15：00～17：00ということだが、ここについては、佐藤さんと小田さんともう作ってしまっていいか、ということ。と、現状としては、富山に話をしているのは、名簿はすでにアップして、計70名みたいなことで、知識ベースを中心に、非認知能力とはなにかということを2時間くらいで教えていただくということで。気にしているのは、70名のうち１番多いのは、大学の関係者になる。短大の関係者で、看護系や観光など、どちらかというと専門学校に近いような学科群ではある。それと、専門学校側の教員と、法人の管理者とかも全部ごっちゃになっているので、教育と非認知能力がどう関係しているのか、というところをできればと思う。あとは、こちらで準備するものや、あちらに望むこととかをまとめていただいてということになる。今回は、富山に2人で言っていただくということで、富山には伝えているので、他に先生方で行かれるのであれば、それを伝えるということになる。あとは、佐藤さんと小田さんは現地に行かれて研修をするということで（小田：そのつもりで。）。小田さんが福岡まで帰れるのか、と教育環境面を気にしていたので、その辺については、佐藤さん、小田さん、と3人でお話をして、ということで。  ・9月1日からSlackの契約が変わる、3ヵ月分しか記録が残らなくなるの、必要なデータについては、各自でダウンロードをするようにしていただきたい。12月になったら9月より前のものはすべて消えると思っていただければと思う。あとは、全専研の方で有料版に入るか、Slackに変わるものとしては、Discord（？）が使われている。DiscordはWeb3になるので、現用のWeb2の1つ上のものになってくるので、頻繁にやり取りができる。Discordに変更する可能性もあるが、とりあえずは、Slackで各自必要なデータはバックアップを取るということで。  →ARについては、来週中に研究者ミーティングをして、今回いただいたものを踏まえてARどの程度必要か、ということを詰めてからお伝えしたいと思う。（植上）  〇次回のWGの日程  ・第3回WG：10月17日（月）の10：00～　（場所：福岡）  〇その他  ・岡山に参加する検証委員：近藤、田澤 |
| 配布資料 |  |

以上